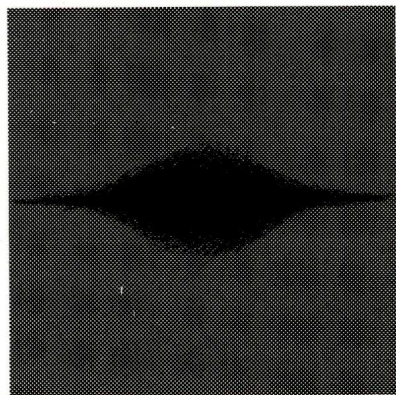


泉鏡花文学の成立

田中励儀
著



双文社出版

泉鏡花文学の成立

田中 劬儀 著

著 者 紹 介

田 中 勸 儀 (たなか れいぎ)

1952年 京都市に生まれる

1976年 同志社大学卒業

1979年 同志社大学大学院修士課程修了

現在、同志社大学文学部教授

泉鏡花文学の成立

印 刷 1997年11月14日

発 行 1997年11月28日

著 者 田中 勸儀 ©

発行者 橋本 和夫

発行所 双文社出版

〒150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目20番地22号

T E L 03(3407)3442 F A X 03(3407)3400

印刷所 (株)暁印書館

ISBN4-88164-518-8

検印廃止

泉鏡花文学の成立

目次

「南地心中」の成立過程——泉鏡花と大阪

…
140

III

「遊行車」の成立過程——泉鏡花と『一話一言』

…
161

「峰茶屋心中」の成立過程——泉鏡花と神戸

…
182

鏡花作品の表現構造と謡曲——『売色鴨南蛮』の場合

…
203

「薄紅梅」の成立過程——北田薄氷・富松登久・伊藤晴雨らをめぐって

…
218

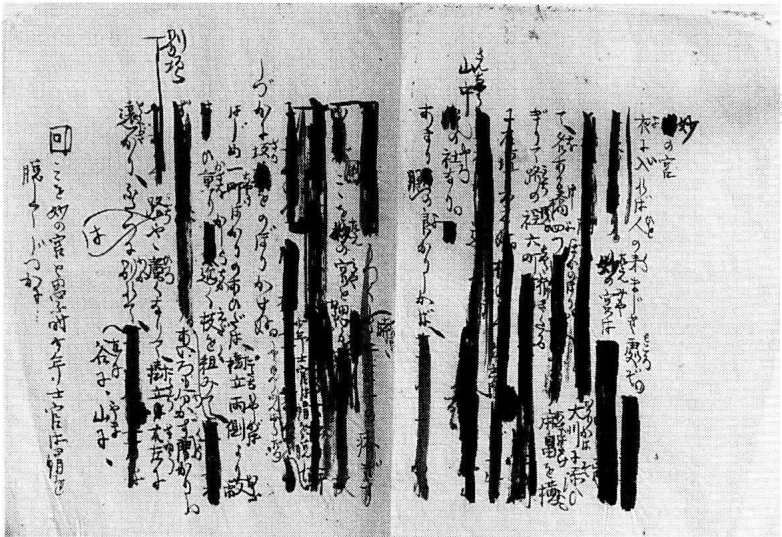
「雪柳」考——一本松の形象をめぐって

…
241

あとがき——「歌行燈」研究にふれて

…
259

I



「妙の宮」草稿（石川近代文学館蔵）

「義血俠血」成立考

——注釈への試み

一

「義血俠血」は、明治二十七年十一月一日から三十日まで全二十七回に亘って「読売新聞」に連載（五日、九日、十七日は休載）。前月同紙に連載された「予備兵」（明27・10・1〜24）と同じく、署名は「なにがし」であった。第一作「冠弥左衛門」以来、泉鏡花の名前で発表してきたにもかかわらず、この二作が匿名とされたのには、「読売新聞」という媒体が関わっている。現在判明している限りで「予備兵」以前の作品は五作。そのうち、「活人形」（明26・5・3）は春陽堂の叢書『探偵小説』の一冊、「金時計」（『新国民』明26・3。『少年文学』第拾九篇、尾崎紅葉『俠黒兎』付録、明26・6・28、博文館）、「大和心」（『幼年雑誌』明27・8・15〜12・1）は少年文学、一般読者向けの「冠弥左衛門」（京都『日出新聞』明25・10・1〜11・20）、「窮鳥」（『根室毎日新聞』明26・9〜10）は地方新聞に発表、というわけで、東京のいわゆる中央紙に掲載された鏡花の本格的な作品は、「予備兵」「義血俠血」が最初となる。

7

周知のとおり、「読売新聞」と尾崎紅葉とのつながりは深い。紅葉は明治二十二年十二月の入社から同三十五年九月頃の退社までの間に、数々の作品を発表するとともに、小説欄の編集に携わっている。たとえば、丸岡九

華に宛て「何か面白い短篇ものなりとも読売へ御投寄なし被下度」(明25、6頃)と寄稿を依頼したり、また逆に「読売の附録に載せられぬ」ほど水準の低い文章の場合、「思案が随筆の義は同人へは極内なれど、拙者が没にいたし候」(明29頃、巖谷小波宛書簡)と、掲載を見合わせるなど、その充実に傾注している。硯友社創立時からの同輩に対しても冷静な判断を下すほどの紅葉が、門下生の作品の掲載に慎重を期したのは当然といえよう。

「予備兵」「義血俠血」の両作は、いわば鏡花の中央文壇へのデビュー作である。紅葉は匿名で読者の反応を窺ったうえで、翌年四月二十八日、春陽堂から『なにがし』の書名で単行本化されるに際し、序文でようやく鏡花の作であることを明示した。ただし、表紙と標題は紅葉・鏡花の連名、奥付では尾崎徳太郎が著者と表記されている。

この間の事情を反映してか、同時代評では紅葉と鏡花との関わりについてさまざまな憶測がなされている。新聞掲載の段階で、早くも「早稲田文学」(明28・1)は、「紅葉曾て戯に人に語りて、思軒のソヽリといふ所を御目にかくべしといへりと 其れかあらぬか近來『義血俠血』『取舵』など異色の文章多し」(「文学者消息」と、両作の紅葉らしからなさを指摘した。「義血俠血」は匿名でも「読売新聞」に掲載されたために紅葉作と目され、「取舵」(「太陽」明28・1)には紅葉の署名があった。しかし、両作が森田思軒張りの、紅葉とは異質の文章であることを見抜いた記者の目は鋭い。鏡花が思軒の翻訳作品に傾倒していた事実は、今では広く知られている。⁽²⁾当時の記者が鏡花の名前を言い当てられなかったのはしかたがないとしても、その作風を体感しえたのは面白い事実である。

鏡花の名前が明かされた単行本刊行以降の批評は、二種類に大別できる。ひとつは「紅葉が本篇に縁遠き人たるを知ると共に、何故に態々実名まで署せざるべからざるに至りしかを怪しむものなり」(「外科室」と「なにがし」とを讀みて」「文庫」明28・10・15)とする無文字庵主人、「鏡花子の処女作は『なにがし』なる名を以て昨九月

の『読売新聞』に載りし『予備兵』なり。続きて十一月の全じ紙上に現れし『義血俠血』（小説界の新潮流）「国民之友」明28・9・13と認める内田魯庵のように、紅葉は名前を貸しただけで、実態は鏡花の作だと断定した批評。もうひとつは、「其想といひ、其結構といひ、全然鏡花の特色を表はして、殆ど一手に出づるの感なきにあらざるも、其行文色彩に至りては、鏡花大に紅葉に負ふ処あるべし」（無署名「時文」新刊「なにがし」）「文学界」明28・7とする「文学界」記者、「所謂ロ、オ、カ、ル、カラアを附せしは金沢の人なりといふ鏡花子が考案なる可く、対話の老練にして、人物と相適せるはいづれ紅葉子が才筆なる可し」（「批評」『なにがし』）「帝國文学」明28・8とする微幽子のように、後年の江見水蔭の比喩「体は鏡花で、衣は紅葉」に通じる紅葉・鏡花合作説である。

この二種類の批評は、いずれも「夜行巡査」（文芸倶楽部）明28・4、「外科室」（同）明28・6）発表後、鏡花が観念小説の新進作家として注目を集めていた時期のものであり、振り返って「予備兵」「義血俠血」における鏡花の独創性に照明が当てられた気味がある。「取舵」についても、「紅葉作と銘打つたれど是正しく泉鏡花が作なり」（太湖『太陽』小説総まくり）「有名」明28・10と断定されるに至るなど、明治二十八年後半は一種の鏡花ブームの感さえ呈している。この文壇の熱い空気がなければ、あるいは、構想・表現ともに大半が紅葉の筆になる作品群と理解されて終ったかもしれない。

二

それでは、具体的な紅葉と鏡花との関わりはどのようなものであったか。「義血俠血」には、慶応義塾図書館蔵の初稿・再稿、及び、石川近代文学館蔵の最終稿の三種の原稿が現存し、相互の異同については、すでに三田英彬⁽⁴⁾、越野格⁽⁵⁾、新保千代子⁽⁶⁾、松村友規⁽⁷⁾、弦巻克二⁽⁸⁾の諸氏が詳細に論じている。それに付け加えるものを持たないが、今回、石川近代文学館のご厚意により最終稿を閲覧できたので、気のついた事を二、三のべてみたい。

最終稿は、縦二十四・七糎、横三十二・〇糎を基本とする和紙を貼り合わせて、全長およそ二十三・四米に及ぶ巻子本仕立てで保存されている。基本の和紙一枚は、二十三行内外で、一行の字数は二十三字から三十字見当。しかし、和紙を切り貼りの箇所が多く、全体の枚数は特定できず、また、字数も書き込みが多いため、一定しない。象牙色布装の表紙に貼られた金地の題簽には他筆で「義血俠血 瀧の白糸原稿 泉鏡花筆」と墨書され、見返しには「先生のおかけにてこれが新聞にいで候ときの嬉しさ忘れ申さず候 鏡花」と自筆で記されている。見返しの筆跡は後年の流麗なタッチで、後に最終稿と対面した鏡花が懐かしさを込めて揮毫したものと推測される。

また、和紙を貼り合わせるに際し、裏打ちに使われた用紙には、「読売新聞社御中」と印刷された紙片や、「校正済月日／書名種類／枚数／摺立月日」の項目を立てた一覽表の紙片が見出せることから、読売新聞社内の人物か、あるいは紅葉が原稿の保存に骨をおったのではないかと思われる。もしも社内の人物であれば、保存に値する作家の原稿と判断すればこそその行為であり、署名は「なにがし」でも、紅葉の作品と信じていたに違いない。

実際、この最終稿は、松村友視氏が指摘するように「鏡花の自筆原稿をとどめるのは連載二十七回のうち冒頭二回分のさらに一部にすぎず、三回以降はすべて紅葉の筆⁹」であり、編集者が紅葉の作品と思い込んで不思議ではない。鏡花筆の部分が丁寧な楷書であるのに対し、紅葉筆の部分は削除や添加、さらには紙を貼り付けての改変など推敲の跡がおびただしく、字体はやや乱雑である。そんな中で第八回の冒頭（岩波『全集』本ほか現行本文では「三」の冒頭に該当、「夜は既に十一時に近きぬ。」）「いと心地快げに見えたりき。」は例外的に楷書で書かれている。夜更け、凄凉とした天神橋上で静かにまどろむ欣弥の姿を点出するこの部分も、松村氏は紅葉筆と断定したが、鏡花筆の可能性もわずかに残り、とりあえず保留したい。

明治二十七年一月九日、父清次死去。鏡花はその直後に帰郷、九月上旬まで金沢に滞在し、家事に従事すると

ともに、原稿の執筆に励んだ。本作はそのうちのひとつで、おそらく再稿が「警判事」と題されて東京の紅葉の許に送られた。より細かい執筆時期については、初稿「第三」の冒頭に「明治二十七年の夏石川県金沢にて開かれたる関西府県聯合共進は諸国より人出の多かるに」と記された形跡が読み取れることから、共進会が開催された同年七月十日前後に書き始められ、また、八月十八日付鏡花宛紅葉書簡に「警判事今一披読致し見所有之候へば十分加筆の上世間に見せむとおもひ候が」という文面が見出せることから、八月中旬までに完成していた事実が指摘されている⁽¹⁰⁾。

この文面どおり、紅葉は十分な加筆を行なった。従って、初稿・再稿は鏡花筆、最終稿は大半が紅葉筆であり、相互の原稿を比較することで、両者の関係の一端が明らかになる。なお、ここでは初稿・再稿は岩波書店刊の複製版『自筆稿本義血俠血』（昭61・11・25）を用い、最終稿は生原稿を用いて検討する。

まず、白糸・欣弥それぞれの登場場面である。白糸の登場は、初稿では冒頭一枚を欠くため不明。再稿では、馬車の乗客を呼び込む小僧の威勢の好い声の中、「通り懸れる小粋な婦人これを聞きて立停り、」と鏡花が記したものを紅葉が朱筆で「通り懸りの小意気なる婦人は立停りて、」と添削。紅葉の指導を全面的に受け入れた当時の鏡花は、その指示に従って最終稿一枚目では「通りすがりの小意気なる女は歩を停めつ。」と記した。ここでも紅葉はふたたび「通過の婀娜者は歩を停めて、」と訂正した。すでに村松定孝氏が指摘していることだが、「小粋な婦人」が最終的には「婀娜者」に変えられているのである。大きな違いではないようだが、しいて言えば、「小粋」に気風の良さが含まれるのに対し、「婀娜者」にはたおやかなまめかしさが含まれる、というニュアンスの違いがある。

一方、欣弥（初稿・再稿では莊之助）の登場は、初稿では「凛々しげに白地の縮の襦衣を着て椽広の麦わら帽子をのけざまに冠りたる色浅黒く鼻高く賤しからざる容貞の御者には過ぎたる風采なり」。再稿では「傍なる待

合所の椽に腰打懸け一冊の書を繙きて前より余念無げに視めたる二十四五の男子」と記されていたものを、最終稿では紅葉によって「盲編の腹掛、股引に汚れたる白小倉の背広を着て、護謨の解れたる深靴を穿き、鰐広なる麦稈帽子を阿弥陀に被りて、踏跨ぎたる膝の間に茶褐色なる渦毛の犬の太く逞きを容れて、其頭を撫でつゝ、専念に書見したりしが、」と改変されている。いずれも、乗合馬車の御者には不釣合いの感がある知性が仄めかされている点では共通するが、「凜々しげに白地の縮の襦衣を着」た、清潔そうな鏡花の莊之助に比べ、「汚れたる白小倉の背広」や「護謨の解れたる深靴」を身につけた紅葉の欣弥の方が、肉体労働に従事する御者の姿をよりリアルに表現している。おおむね、鏡花の白糸・莊之助が非日常的な理想の男女として描かれようとしていたのに対し、紅葉の白糸・欣弥はそれぞれの日常性が描き込まれようとした傾向が見出せる。

三

ここで、金銭の問題を考えたい。人力車との競争の後、休憩所で平然と休息をとる御者に対し、車夫に追い抜かれた悔しさをかこつ乗客らは小銭を集めて、早く発車するように訴える。その時、白糸が投じたお金は、初稿・再稿では「一円紙幣」だったものを最終稿では「半円銀貨」に減らされている。この時点ではまだ御者に心惹かれていたわけではなく、面白半分に募金に応じただけの白糸なので、一円では多すぎると紅葉が判断した結果だろう。これに対し、御者に抱えられて疾駆する馬に乗せられた白糸は、恋心を芽生えさせた後、天神橋での再会場面では、「此に三十円あります。まあ此だけ進げて置きますから、(略)一日も早く東京へ御出なさいな」(最終稿)と申し出る。初稿・再稿では「一束の紙幣を取出だして」とだけ記されて、金額の明示がなかったことを考えると、紅葉は休憩所での「半円銀貨」から天神橋での「三十円」への増額に、目に見える形で白糸の心情の変化を表わしたものとえよう。

数年後、金策に行き詰まった白糸は越前福井の金主から興行の前借りをする。その金額は、初稿では、一旦、「三十日間百五十円」、また、「四十日間百五十円」などと記した部分を抹消し、改めて「六ヶ月間百五十円」の契約と決められた。そして、窮状を打ち明けた白糸は「全金額を請求せしに工面よき金主なるがうへに太くお玉に打込みたれば直ちに前金を渡しくれたり」と記される。前金の額は明示されない。次いで再稿では、「六ヶ月間二百円」と増額されたうえに、金主は「直ちに全額を渡し呉れたり」と気前のよいところを見せている。これは、不義理な借金を返済した残りの百円を、仕送りに充てるために構想されたものだろう。しかし、季節に左右される水芸一座を半年間も雇ったうえに全額を前払いするような、お人好しの興行主がいるとはとても考えられない。

紅葉はこの不自然な趣向を改めるべく、最終稿では「二箇月間三百円にて雇はむとの相談は調ひ（略）其三分の二を前借^{ぜんせき}」したことに改めた。ここでも他の借金を返した残りは約百円とされるが、初稿・再稿では「莊之助に一ヶ年の仕送^{しおく}はなし得べし」と記されていた貨幣価値を、最終稿では「欣弥母子が半年の扶持^{ふち}に足るべし」と改稿されている。『値段史年表⁽¹²⁾』によると、明治二十年代後半の帝国大学の授業料は年額二十五円、東京での白米の小売価格は十軒六十七銭、家賃が一ヶ月三十八銭であったというから、東京・高岡ふたつの家庭を維持するには、紅葉が示した金額の方がより現実的だと考えられる。白糸・欣弥の風貌同様、金銭面でも紅葉は日常性を大切にしたのである。

次に、天神橋での人力車の相乗りについて考察したい。深夜の密会を冷やかした車夫を呼び止め、にわかに東京へ向けて出立するという莊之助の決意に驚いた白糸が、進められて、はにかみながら一人乗りの俥に同乗する場面は印象的である。齋藤俊彦『人力車⁽¹³⁾』によれば、石川県では、明治四年五月に金沢の金欄商城森文次が大坂から一輛買い求め、車夫を雇って陸路数日を費やして帰ったのがその嚆矢であり、明治七年には早くも三

百六台が当地で生産されるほど、爆発的な人気を得たという。当初から人力車には一人乗りと二人乗りとがあったらしいが、二人乗りは速度が遅いという欠点から次第に衰退し、全国統計では「八年から十六年までの二人乗りは全体の三〇・三五％、二十九年には八％まで減じた」という。白糸が「一人乗りにお前相乗（あひり）が出来るものかね」（再稿、他もほぼ同じ）と言ったのには、このような背景がある。

ところで、明治六年三月に東京府では「人力車横幅の内法（うちのり）が曲尺（かどばし）にて二尺までを一人乗りとし、二尺以上を二人乗りと定めた」。金沢での適用は不明だが、大きな違いはないだろう。二人が乗った俥の横幅が約六十・六寸とすればかなり窮屈で、初稿・再稿の莊之助に「待ちなよ膝の上へ乗つけて進（あ）げやう」と誘われた白糸が、毛布（けいふ）を「男の肩に被（き）せ懸（か）けて後抱（うしろだま）に抱かれて乗る」姿勢になったのは当然である。いわば狭い俥の中で毛布に包まれた二人は、莊之助の「宜（よろ）しい、最早決（はや）して他人ではありません」の言葉を実現するかのようになり、同衾の夢を見たといつてよい。白糸には、石動までの馬上での《抱擁》の再現と感じられたことだろう。鏡花はこの場面の重要性を晩年に至るまで確信していたらしく、昭和十三年八月の新派明治座公演に際して、白糸役の喜多村緑郎、欣弥役の柳永二郎の二人が太っているために、人力車の相乗りを削りたいと申し入れたところ、原作者の鏡花は「車に二人が乗れないのならば『滝の白糸』はやらせない」というくらい執着した逸話（逸話）が残されている。

この場面について最終稿の紅葉は基本的には鏡花の構想をなぞりながらも、『構ふことは無い。早く乗ったく』。欣弥は手招けば、白糸は微笑（ほほえみ）む。（略）『否（いや）だよ、欣様（きんさん）。』『可（い）いさ、可（い）いさ！』と欣弥は一笑せり。」と記すのみで、俥中での二人の姿勢には触れない。前に引用した紅葉・鏡花合作説を採る同時代評は、「對話の老練」を紅葉の才筆に帰しているが、おそらくそのとおりだろう。この天神橋での二人の会話は洗練されたものである。しかし、これでは二人は横並びに座ったとの誤解を与えかねず、紅葉は鏡花の意図をずらせる結果を招いたといえよう。